野鳥だより —北海道—

第 30 号

編集者　北海道野鳥愛護会
発行者　北海道国土緑化推進委員会
発行日　昭和52年12月21日

ソデグロヅル

ソデグロヅルの成鳥一羽が、十月十一日ころから木古内町の水田地帯に飛来し、滞在しているのが確認されました。このツルは、北部シベリアに点在して繁殖し、冬季は中国南部、インド、カスピ海方面へ渡って越冬しますが、日本には稀にしか飛来しない珍しい鳥です。

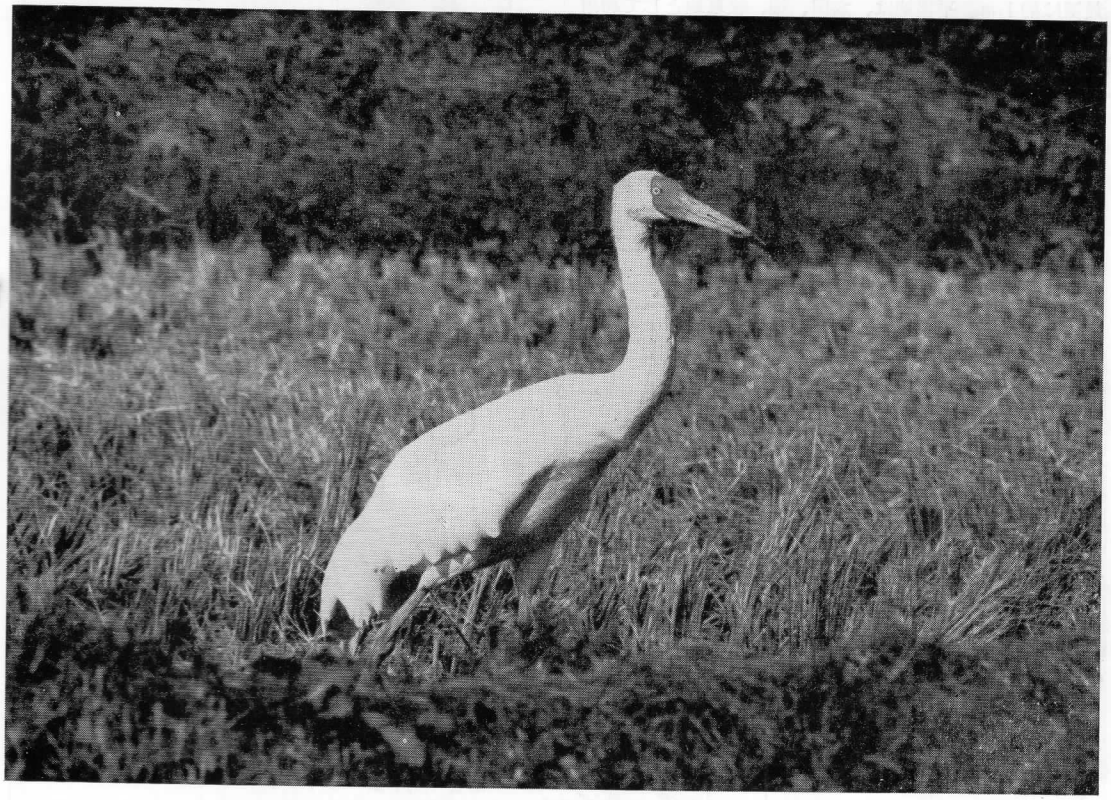
日本からの記録は、一八〇〇年代にシーボルトが採集した三羽と日本産といわれる一羽（オランダのライデン博物館などに所蔵）があるだけで長く絶えていました。

ところが、一九五九年十一月から六〇年二月に鹿児島県出水市荒崎のツル渡来地に若鳥一羽が滞在し、百年ぶりの出現と騒がれました。そして翌冬、一九六〇年十一月から六一年二月に再び荒崎に若鳥一羽が滞在しました（この鳥は羽色の状態から前年の個体とは別と考えられている）。さらに六一年四月十一日から五月二十四日にかけて、石川県羽咋市邑知潟の飯山川河口で成長一羽が観察され、その後、六九年十一月九日に沖縄県与那城村西原の水田で捕獲された成鳥一羽が、最近の記録です。

北海道からの確認記録はこれが初めてであり、最近における五回目の記録といえます。

ソデグロヅルの総個体数は六百羽あるいはそれ以下とも推定され、アメリカシロヅルなどと同様に絶滅の恐れがあるとさえいわれており、そっと見守ることが最良の保護ではないかと思います。

（十一月二十六日記）



木古内町建川　昭和52年10月22日　文・写真　梅木賢俊

北見市の野鳥

――3年間の記録――

鷲田善幸

1. はじめに

昭和49年4月、北見工業高校に国語教師として赴任、以来52年3月までの3年間に観察した記録をまとめてみた。もとより、鳥歴の浅い筆者の観察なので、不十分な資料であるが、今後の調査の参考になることを願い発表する。

2. 観察地域のあらまし

オホーツク海から50kmほど内陸、北見盆地の中心に人口9万人強の北見市がある。

標高は、市街地が70～130m、最も高い仁頃山で829mである。気温は、夏の30℃から冬の－30℃までと、寒暖の差が大きい。積雪は、12月初旬から4月初旬までで最深は約1m。平坦地は、水田、畑、牧草地として利用されている。山地は、カラマツを中心とする針葉樹の人工林が大半で、一部に針広混交林や広葉樹を中心とする雑木林がある。河川は、常呂川、武華（無加）川が主なもので、湖沼はない。

筆者が主として観察したのは、市の西側、相内町及び東相内町においてである。

3. 観察方法及び回数

休日や早朝に、不定期ではあるが、一応四季を通して行った。鳥種の識別は、肉眼、9倍の双眼鏡を主とし、稀に25倍のプロミナーを用いた。

観察回数は〔表1〕の通りで、1週間に1回を目標としたのだが風邪を引いたりなどして、ばらつきが多くなってしまった。

4. 観察の結果と説明

3年間に記録した鳥は、1回のみの観察というものも含めて、28科72種である。湖沼や海がないので、水鳥が非常に少ない。原生林や原野がほとんどないため、シマアオジ、アオバト等、網走支庁の他地域で見られるものが観察できなかった。

種名と出現期間は〔表2〕にまとめた。多少説明を加えてみる。

(1)ハシブトガラとコガラを識別できないので、コガラらしいものも、ハシブトガラとしてある。

(2)ヤマセミは、毎年1つがいを見たので、繁殖の可能性もある。

(3)ミヤマカケスは夏季、山間部に漂行するため市街地等では見られなかった。

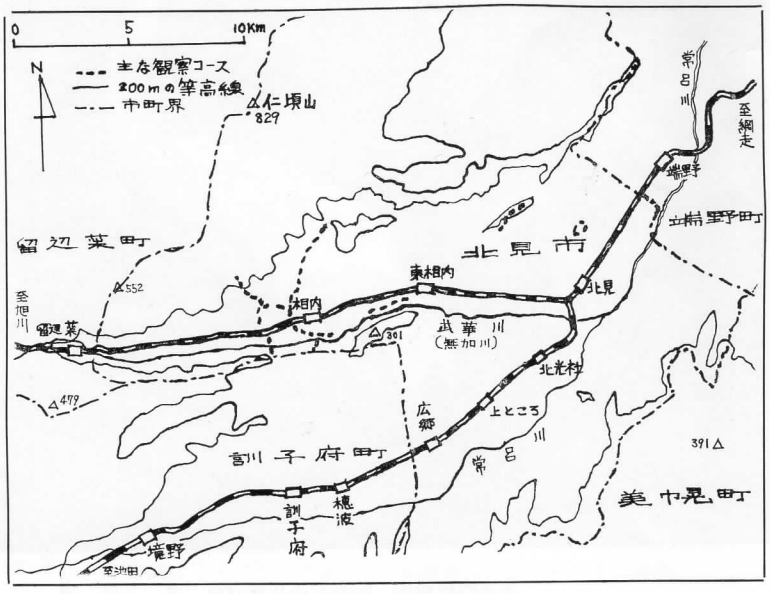
(4)キレンジャクは1976年は5月まで見られた。1977年は全く見られなかった。

月別種類数は図の

ノビタキ

（撮影　筆者）

北見市略図



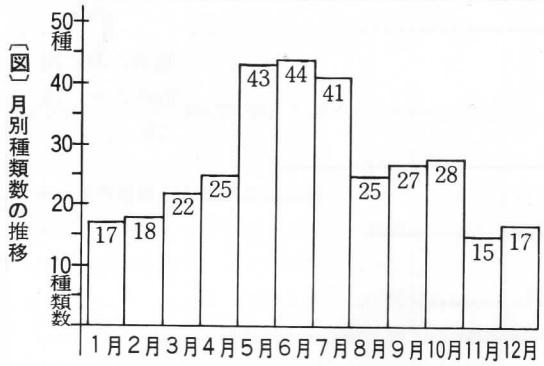
〔表1〕観　察　回　数

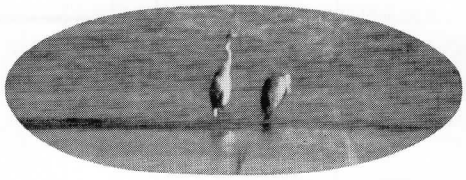
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
1974				3	5	3	3	2	1	5	4	4	30
75	2	1	2	1	4	8	4	2	3	5	1	0	33
76	1	4	1	5	5	6	5	3	5	5	2	4	46
77	5	3	11										19
計	8	8	14	9	14	17	12	7	9	15	7	8	128

ごとくで、観察回数と出現種類数は相関関係にある。8月の25種は観察不足のようだ。

分析は、粗末な記録なのでしない。多くの見落とし、見誤りもあろう。昭和52年4月に日高に転勤したため、疑問の点や観察不足を自ら確かめ、補正できないのが残念である。他の方の観察により補正されることを期待したい。

これをまとめるにあたり、他の方の発表を大いに参考にした。誌上でお礼申し上げる。





アオサギ（撮影　筆者）

（沙流郡門別町富川732　富川高校）

【表2】 北見市の鳥類リスト及び出現期間

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
サギ	アオサギ							○		○				武華川
ガンカモ	マガモ					○○								武華川
	カルガモ					—	—	—	—	—	—			
	コガモ					○								武華川 '74
ワシタカ	トビ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	ハイタカ			○○							○			
ハヤブサ	ハヤブサ	○												上空通過 '76
	チゴハヤブサ						○							上空通過 '76
クイナ	ヒクイナ						○							鳴声のみ '75
チドリ	コチドリ					—	—	—						武華川
シギ	タカブシギ					○								'76 3羽 R
	イソシギ					—	—	—	—	—				武華川
	オオジシギ				—	—	—	—	—					
ハト	キジバト			—	—	—	—	—	—	—	—			
ホトトギス	カッコウ					—	—	—	—					
	ツツドリ					—	—	—						
アマツバメ	アマツバメ							—	—					
カワセミ	ヤマセミ				—	—	- - -	—	—	- - -	—			武華川
	カワセミ					—	—	—	—					武華川 '74
キツツキ	ヤマゲラ	—	—								—		—	
	アカゲラ	—	—	—	—	- - -	—	—	—	—	—	—	—	
	コアカゲラ											—	—	
ヒバリ	ヒバリ			—	—	—	—	—	- - -	—				
ツバメ	ショウドウツバメ						○○							'76
	イワツバメ					—	—							

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
セキレイ	キセキレイ				—	—	—	—	—	—				
	ハクセキレイ		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	セグロセキレイ									—		—		
	ビンズイ							○						'76
ヒヨドリ	ヒヨドリ	—	—	—	—	—	—			—	—	—	—	
モズ	モズ				—	—	—	—	—	—	—			
レンジャク	キレンジャク	—		—	—	—							—	'76 多い
カワガラス	カワガラス		○											'76 1羽
ヒタキ	ノゴマ						○							'75
	ノビタキ				—	—	—	—	—	—				
	マミジロ							○						鳴声のみ '76
	トラツグミ						○							鳴声のみ '76
	クロツグミ					○								'76
	アカハラ					—	—	—	—	—	—			
	ツグミ		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	ウグイス					—	—	—	—					
	エゾセンニュウ							○						鳴声のみ '76
	コヨシキリ						—	—	—					
	オオヨシキリ					—	—							
	メボソムシクイ						○							'76
	エゾムシクイ					○								'76
	センダイムシクイ					—	—	—	—					
	キビタキ						○							'75 ♂1 R
	オオルリ							○						'76 ♂1 R
エナガ	シマエナガ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	- - -	—	
シジュウカラ	ハシブトガラ	—	—	—			—	—		—	—	—	—	
	ヒガラ	—		—		—					—			
	シジュウカラ	—	—	—		—	—	—	—	—	—	—	—	
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	—		—						—	—		—	
ホオジロ	ホオジロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	ホオアカ				—	—	—	—						
	カシラダカ		○								○			
	アオジ				—	—	—	—	—	—	—			
	オオジュリン					○	○							'76 7羽
アトリ	カワラヒワ		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	マヒワ										○			'75 カラマツ林100+
	ベニヒワ		—											'76 冬は多い
	オオマシコ			○										'77 R
	ベニマシコ					—	—	—	—	—	—			
	シメ				—	—	—	—		—				
ハタオリドリ	ニュウナイスズメ					—	—	—						
	スズメ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ムクドリ	コムクドリ					—	—	—						
	ムクドリ	○		—	—	—	—	—			—			冬季少数残留
カラス	ミヤマカケス	—	—	—	—	- - -	- - -	- - -	- - -	—	—	—	—	
	ハシボソガラス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	ハシブトガラス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

1. 科名及び種名の配列は、「日本鳥類図説」内田清之助1974に従った。 2. 野外で容易に識別できるもののみ、亜種名を用いた。 3. 表中の点線は、未確認だが、その期間の生息が確実と思われるもの。 4. Rは稀な記録を示す。

★山階芳麿博士とデラクール賞　　**井上元則**

本年6月26日付朝日新聞に鳥類の山階博士に「トリ勲章」ジャン・デラクール賞が授与されることになったという記事があった。私は昭和7年からご指導をいただいているので、早速およろこびのお手紙を差上げておいたところ、8月20日米国ウィスコンシン州マジソン市のウィスコンシン大学で開かれる国際鳥類保護会議（ＩＣＢＰ）で賞を渡される旨のご連絡をいただいた。

9月初めごろ黒田長礼博士外19名の名士が発起人となり、「山階博士デラクール賞受賞記念祝賀会」が結成されて、招待状をいただいた。私はこのような皇族、政界、財界、鳥学会などの名士の祝賀会にご招待をいただいたのを機に9月20日の飛行機で、北海道からただ一人馳せ参じた。

ジャン・デラクール賞とは、国際鳥類保護会議の名誉会長をつとめ、キジ類や水鳥の研究で国際的に知られているジャン・デラクール氏が自ら基金をきょ出して、1967年設立した賞で、国際鳥類保護会議の米国支部が基金を管理し、同支部に設けられている選考委員会で満場一致で推薦されることが条件になっている。選考基準は①鳥学の研究②鳥類の保護③保護のための人工増殖にすぐれた業績をあげた人に限られ、一つの条件を欠いても授与されないという。

このように選考条件が厳しいため、これまで受賞したのは、1968年ドイツのコンラット・ローレンツ博士（ノーベル賞受賞者）、第2回は1970年英国のフィリス・バークレースミス女史、第3回は1972年ベルギーのレオン・リッペン伯爵、そして第4回の受賞者として1977年に山階芳麿博士が選ばれたものである。鳥類関係において最高の栄誉とされている。

なお、ジャン・デラクール博士は仏国の旧家に生れ、鳥学、保護、保護のための人工増殖の三つの分野で最高の貢献をした今世紀最大の鳥学者とされており、国際鳥類保護会議の第2代会長を20年間つとめ、その他幾つかの国際団体の会長をつとめているので、その偉業をたたえてこのメダルはジャン・デラクール・メダルと名づけられたものである。

山階芳麿博士は山階宮家の二男として生れ、幼時から鳥が大好きであったというが、陸軍幼年学校、陸士を経て陸軍中尉まで勤められたが、長い一生、自分に適した道をと思って27歳の時軍人を辞めて東大理学部へ。北大でも学び、鳥の細胞遺伝学を専攻し理学博士となられ、終戦時まで侯爵であった。陛下といとこ同志に当たり、幼友だちと承っている。山階先生の大著「日本の鳥類と其の生態」2巻は不朽の名著である。

さて9月20日霞会館で行われた山階芳麿博士受賞祝賀会は常陸宮両殿下のご臨席の下に、黒田長礼博士の発起人代表のごあいさつに続いて、宮様、海部文相、鈴木農相、入江侍従長、環境庁長官、井出一太郎代議士、日本鳥学会長古賀忠道先生、財界人では江戸英雄氏、佐治三井不動産会長などの順で祝辞があり、山階博士の答辞で開宴となった。黒田長礼先生の乾杯があり、学友中川以良氏などのテーブルスピーチがあった。日本鳥類保護連盟の楠木氏が終始司会進行をつとめられ、まことに盛大であった。終りに遠い北海道から良く来てくれたといわれ、最後の万才三唱を筆者が果した。

ジャン・デラクール賞（左が表でデラクール氏の胸像、右はデラクール氏が発見、命名した帝王雉

（江別市元野幌 291）

〈新年懇談会〉

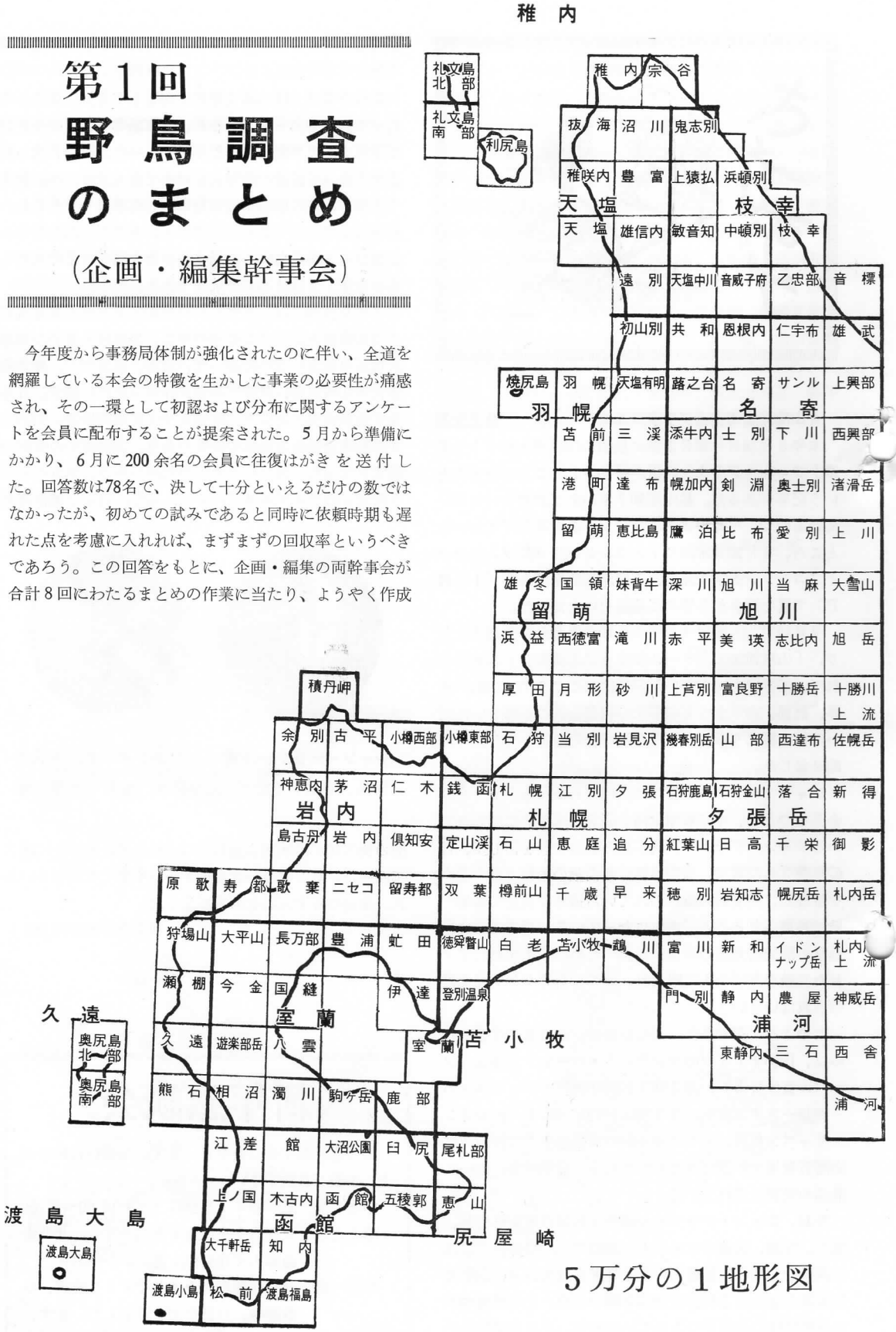
次の通り新年懇談会を行います。お誘い合わせの上、多数ご参加下さい。

◇と　き　昭和53年1月28日（土）14 00～17.00
◇ところ　札幌市中央区北1条西7丁目　「北海道婦人文化会館」電話251—6349
◇内　容　会員作製のスライドや8ミリ映画、観察報告、懇話などを予定しています。

第1回
野鳥調査のまとめ

（企画・編集幹事会）

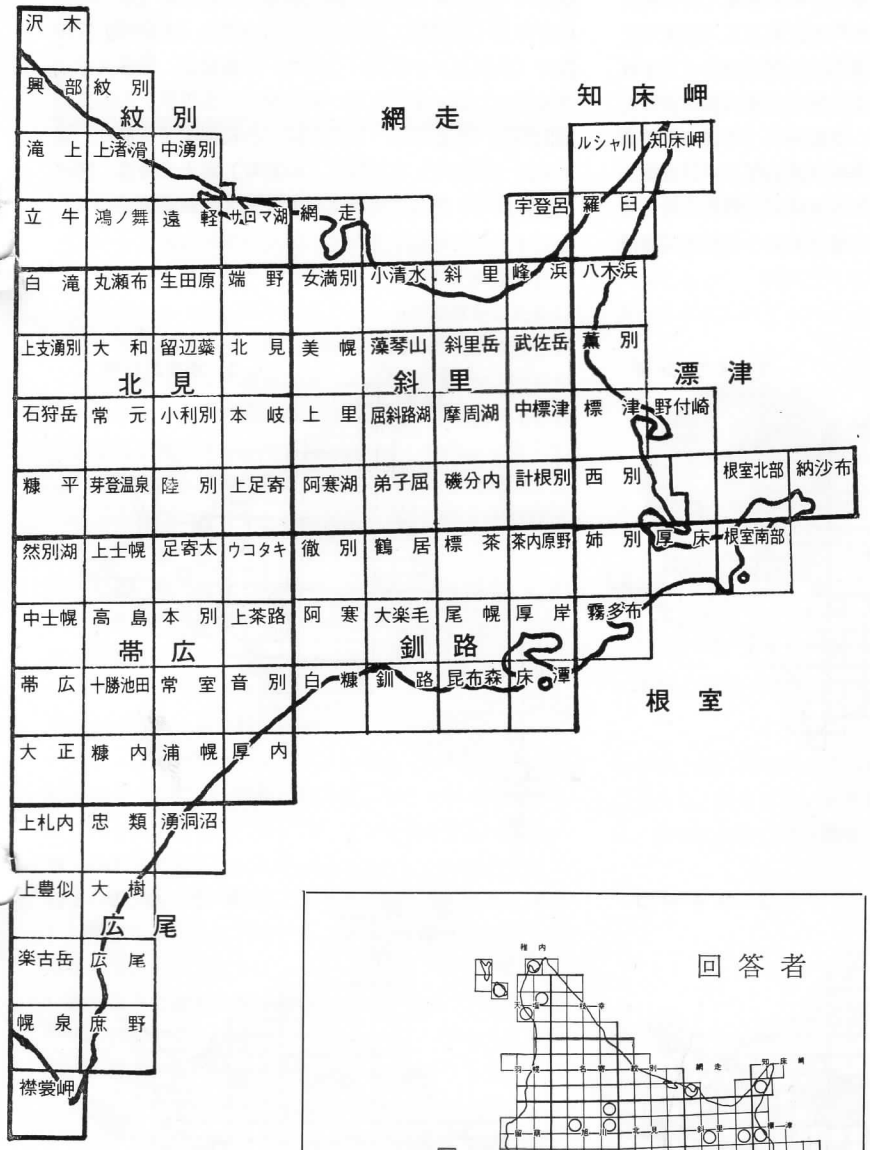
今年度から事務局体制が強化されたのに伴い、全道を網羅している本会の特徴を生かした事業の必要性が痛感され、その一環として初認および分布に関するアンケートを会員に配布することが提案された。5月から準備にかかり、6月に200余名の会員に往復はがきを送付した。回答数は78名で、決して十分といえるだけの数ではなかったが、初めての試みであると同時に依頼時期も遅れた点を考慮に入れれば、まずまずの回収率というべきであろう。この回答をもとに、企画・編集の両幹事会が合計8回にわたるまとめの作業に当たり、ようやく作成

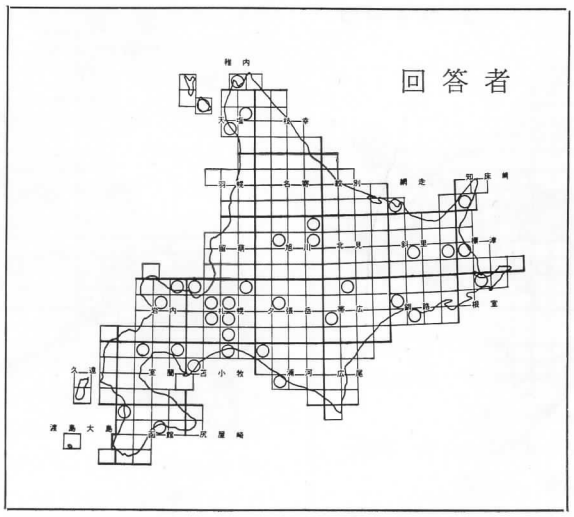


5万分の1地形図

できたのが別掲の分布図である。当初は初認記録の集計に重点を置いたにもかかわらず分布図としてまとめざるをえなかったのは、寄せられた回答の中に既知の記録よりもはるかに早い初認例が相当数含まれており、現段階で生のデータとして発表することに躊躇したためで、今後回数を重ねた上でとりまとめる予定でいる。

分布図作成に至るまでの手順を簡単にまとめると、まず国土地理院発行の5万分の1地図1枚に相当するメッシュ（区画のことで、1辺が約20km）に区切った北海道地図を用意した。次に回答者の調査区域がどのメッシュに含まれるかを特定してから、種類ごとに地図上のメッシュに○印をつけた。実際は同一メッシュ内につき複数の回答が得られた場合もあったが、双方を特に区別せずに印をつけた。ただ全道一円をくまなく網羅するだけの回答は得られなかったことから、便法としておおよそ過去15年間に発表された文献のうち、地域を特定できるものに限って同じ手法により○印をつけた（大きい○印がアンケートによるもので、小さい○印は文献から抽出したもの。両方の記録がある場合は◎）。抽出した文献を一括掲載することは、今回はスペースの関係で無理なため、いずれ機会をみてまとめることにしたい。



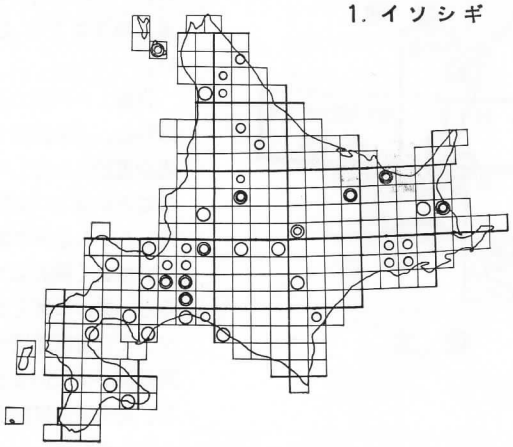


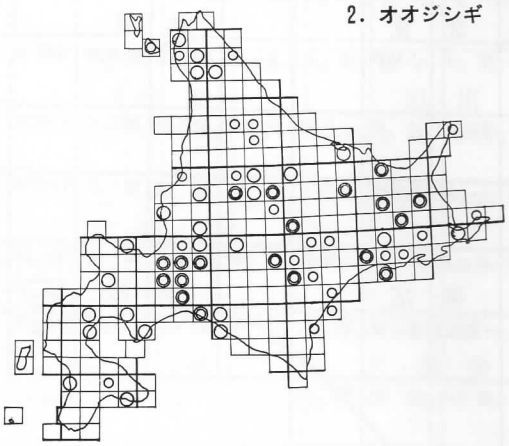
作成した14種の分布図から、どの種類も一応全道的に分布していることが確かめられた。しかし個々の種についてよく検討してみると、アカモズとクロツグミは道東地域での記録例が少ないようだし、従来道央以南が分布域とされていたメジロ、ヤマガラが道東、道北地方からも報告されるなど、興味ある結果が得られた。

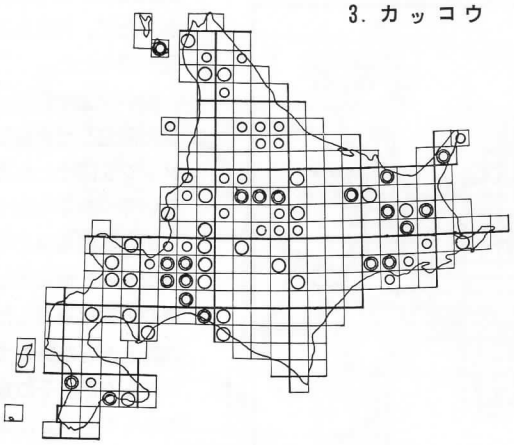
狭い地域や特定の種類に限定して作成したメッシュ図はこれまでもいくつか作られているが、北海道ほどの面積をもった地域にこの種の方法を適用した例はほとんどないのではなかろうか。その意味からも不十分さは認めつつも意義深い事業と評価できよう。来年度

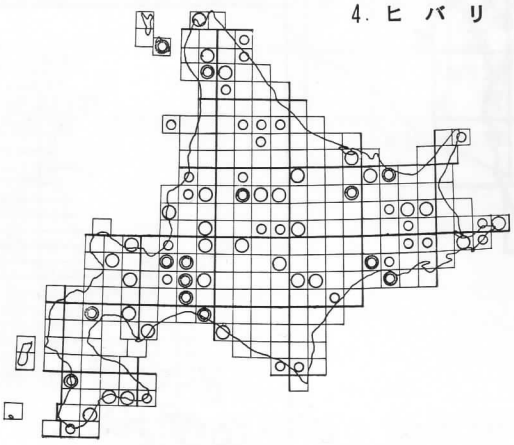
以降もこの事業を継続していくことになっており、現在空白のメッシュを埋め尽くして完全な分布図を作成すべく、会員の皆様のご協力を今後ともお願いしたい。またこの種の調査の模範ともいうべきイギリスの例については、次号で紹介したいと考えている。簡単なまとめを閉じるに当たって、アンケートに回答を寄せられた次の方々、ならびに未発表の調査資料を快く提供して下さった北大農学部・阿部永助教授に厚くお礼申し上げる。

（函館市）隅田重義　森口和明　田原偉成　高橋節（江差町）脇田勝之進（長万部町）野原直人（室蘭市）伊藤正清（壮瞥町）松本貢（登別市）伊奈昭夫（苫小牧市）松岡茂　伊藤庄一（共和町）坂本正雄（倶知安町）上田璋（小樽市）竹内喜代治　中野高明（札幌市）新妻博　白沢昌彦（江別市）藤林忠雄（長沼町）木田重雄（恵庭市）小山政弘（千歳市）湯本信幸　榊原茂樹　金山哲夫（門別町）梅沢幸子　鷲田善幸　牛坂守（浦河町）赤坂猛（石狩町）佐藤康雄（岩見沢市）大垣内四郎　船造淳一　吉本勉（栗山町）佐藤清左衛門（美唄市）正富宏之　鈴木悌司　大角武雄　中田圭亮（深川市）高橋守夫　五十嵐仁（新十津川町）鶴田儀夫（富良野市）有沢浩（新得町）村田義一（帯広市）藤巻裕蔵　上田治之　戸田敦夫　小野登志和　平沼裕（上士幌町）川辺百樹（釧路市）高谷鉄造　斎藤晃　橋本正雄（阿寒町）渡辺徳介（弟子屈町）百武充（中標津町）岡薫　中川元　梅本正照（別海町）三浦二郎（根室市）高田勝（羅臼町）広野孝男（網走市）大西重利　山田訓二（美幌町）原田喜芳（白滝村）小松堯（上川町）中条良作　佐藤文彦（旭川市）佐々木仁八郎　石川悦子　山田弘　山田良造　畠山周治　佐藤正三　柴田直臣　小松善明（苫前町）荒川晴郎（天塩町）田所信久（幌延町）富士元寿彦　溝井茂（稚内市）先名征司（東利尻町）久保田喜雄

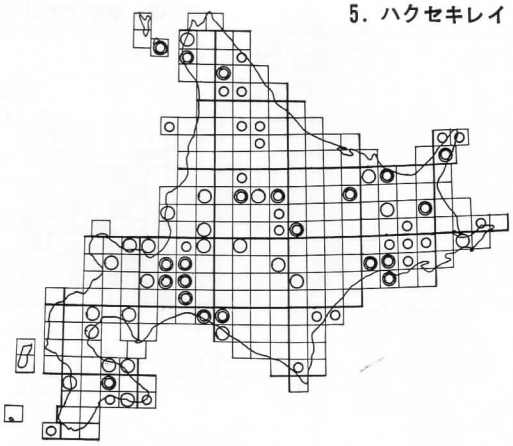

1. イソシギ


2. オオジシギ

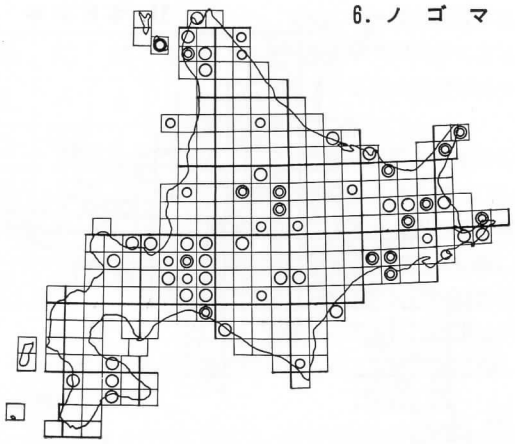

3. カッコウ


4. ヒバリ

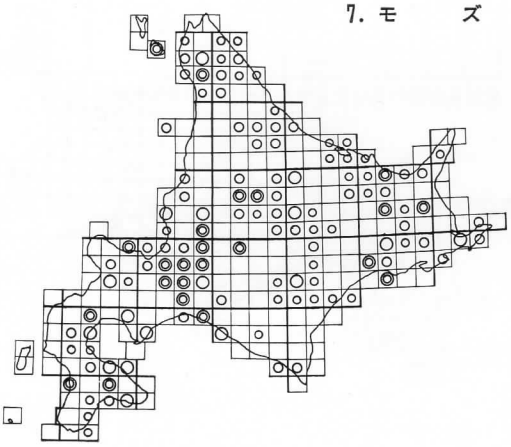
5. ハクセキレイ



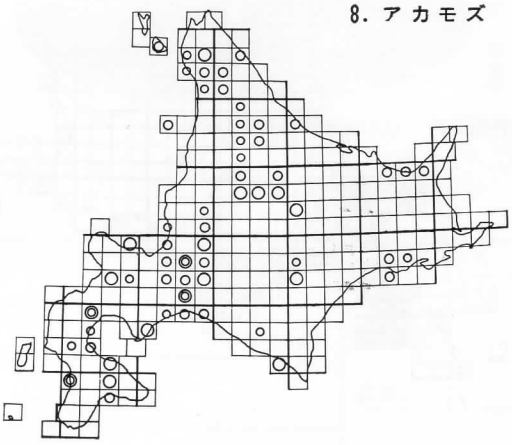
6. ノ ゴ マ



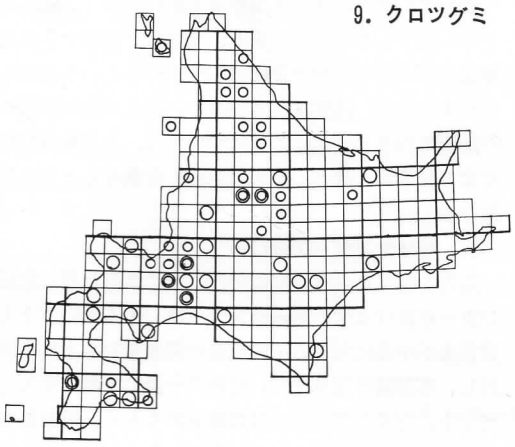
7. モ　　ズ



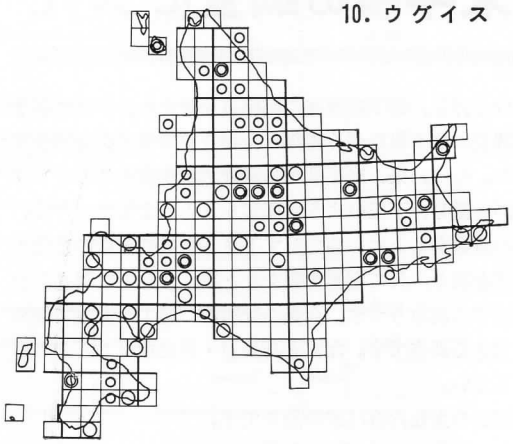
8. アカモズ

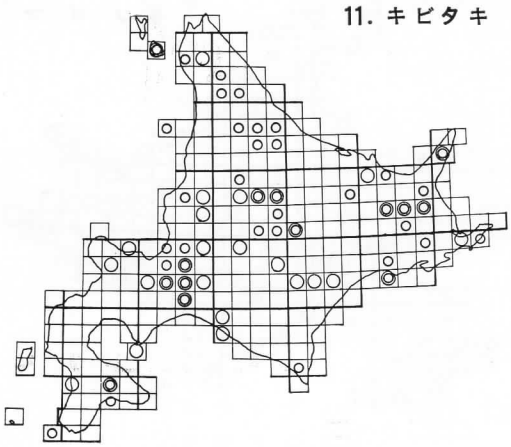


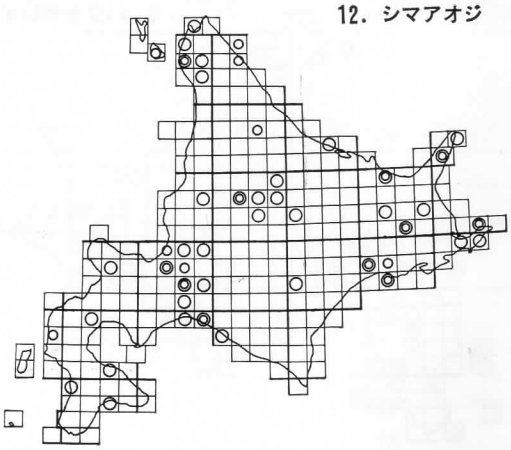
9. クロツグミ

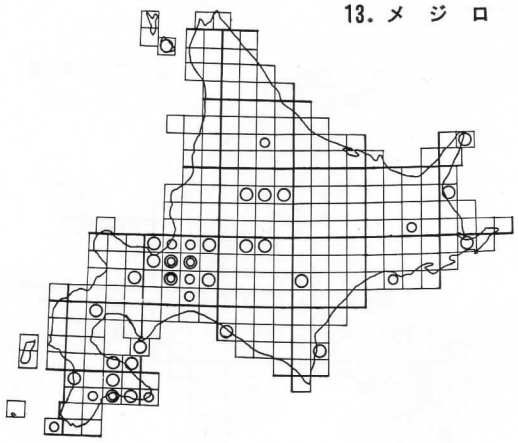


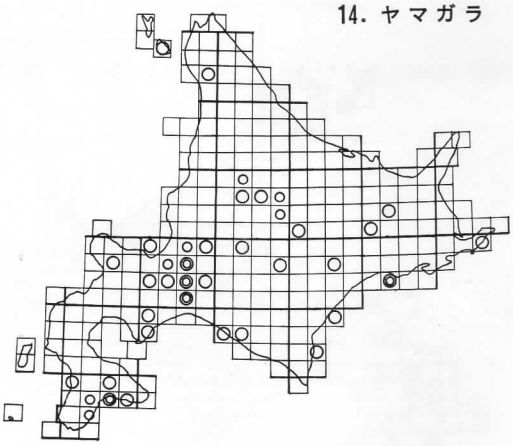
10. ウグイス











来年度の調査について

11月17日、第1回調査の問題点を踏まえ、早めに第2回調査に取り組むべく編集・企画合同の検討会を開きました。その結果、来年度から調査方法を変えることで意見が一致し、下記のような原案をまとめました。今後、この原案をもとに、協力して下さる会員の皆様の意見・要望を取り入れて実施要領をまとめ、3月中に調査票を発送する段取りです。会員の皆様のご協力があって初めてできる調査です。なにとぞ要望・意見をどしどしお寄せ下さい。

原案の主な内容は次の通りです。

1. 調査票ははがきをやめ、チェックリストを用いる

チェックリストというのは、100種程度の鳥を挙げ、観察の度に見た鳥をチェックしてもらう用紙です。もしそこに挙げていない珍しい鳥を見た場合は、空欄部分に鳥の名を書きチェックします。また、初認記録を記入する欄も設ける予定です。

この方法だと、鳥の種類を選ぶ手間が省け、継続調査という点でも有利です。また、分布図を公表する場合、精密度の高いものを十分検討して選べるという長所もあります。ただ、種類数が多いため、記入の際のばらつきが問題になりますが、これについては、3月発行の野鳥だより31号に「調査、記入の手引」を載せることにしております。

2. 地域センターを設ける

道内を10ブロック程度に分け、そこにそれぞれ地域センターを設けます。地域センターは、1人ないし2人の責任者が中心になり、その地域の調査票をもとに中間集計し、事務局へ送ります。札幌で一括して集計する方式ですと、どうしても各地域の事情にうとく、情報収集にも自ずと限度があるため粗いものになりがちです。今回の調査でも空白部分が多く、資料としての価値が小さくなりますので、これを補い、精密度を高めるため設けるものです。

地域割りについては、責任者になって下さる方の要望や意見、地域の事情、会員数を考え合わせ決定する予定です。

3. 道内居住全会員に調査員をお願い

今回は、札幌及びその周辺の会員の方には調査をお願い致しませんでしたが、より精密度を増すため、道内に居住する全会員にお願いする予定です。その際、調査票は居住地の地域センターに送っていただくことになります。

最後に、会員の皆様に今回の調査にご協力いただいたことを感謝し、併せて今後も一層盛り立てて下さるよう願っております。　（文責・小川・森）

〈藤の沢探鳥会〉

◇とき　昭和53年1月29日（日）10.00～14.00

◇ところ　札幌市南区藤野2区〝白鳥園〟電話011(581)8317

◇内容　札幌の郊外〝藤の沢小鳥の村〟の小沢村長さん宅の給餌施設に集まる野鳥を観察します。アカゲラ、ヤマゲラ、シジュウカラ、カケス、ヒヨドリ、ツグミなどが見られます。暖房つきですので、家族向きです。

◇交通　定鉄バス定山溪線「藤の沢」停留所で下車し白鳥園まで徒歩15分くらい。所要時間は札幌駅前から藤の沢まで40分くらい。合計約1時間。

◇持ち物　昼食、観察用具など。

◇参加費　200円

◇その他　雪が降っても行います。昼食時にみそ汁を用意します。室内からの観察ですが、足まわりはゴム長靴が何かと便利です。

〈野幌探鳥会〉

◇とき　昭和53年2月19日（日）9.00～14.00

◇ところ　国鉄「大麻駅」待合室に午前9時までに集合。野幌森林公園内大沢園地周辺を歩きます。歩行距離は約10キロメートル程度です。

◇持ち物　昼食、観察用具、歩行に適したスキーが必要です。

◇その他　吹雪でない限り行います。防寒等の用意を十分に。

〈ウトナイ湖探鳥会〉

◇とき　昭和53年3月26日（日）10.00～14.00

◇ところ　苫小牧市植苗のウトナイ湖畔観光ホテル前（ウトナイ遊園地バス停下車）に午前10時までに集合。

◇内容　北帰途中のコハクチョウ、オオハクチョウ、ヒシクイなどのガンカモ類やオジロワシ、オオワシが見られます。

◇その他　雨天あるいは吹雪でない限り行います。

〈連絡先〉　札幌市中央区北4西5（林業会館）
北海道国土緑化推進委員会内
北海道野鳥愛護会　電話261—9022

鵡川探鳥会

小野寺 敬子

列車の中で洋書の鳥の図鑑を皆で見ているうちに、あっという間に鵡川へ着いてしまった。私にとっては1年ぶりでとても懐かしい。

まず草原の鳥から観察。すでにノビタキが冬羽になっており、ちょっと物足りない気がしないでもなかった。河口間近の牧草地のはるかかなたにオオタカを発見。と間もなく木の上にとまってくれる。目の上の白線と胸の線がよく目立つ。しばらくすると、なんとハクセキレイ約30羽に追われて、いずこへともなく去ってしまった。小鳥などが彼らの敵である捕食者に対して群れを作り、騒ぎ立てて自分たちの安全範囲から追い出すという擬攻撃（モビング）ではないかということになった。思いがけないものをまのあたりに見て、貴重な体験ができた。

その頃から空模様が怪しくなり、やがて雨が降り始め昼食時には本降りとなった。リュックを背負って傘をさしながら、あいている片手でジュースとパンやオニギリというのには閉口する。（しかしみんな雨ニモマケズしっかりと食べたのでした）

この日はシギ、チドリ類はそうたくさん出なかったがはるかかなたにウミネコの群れが羽づくろいをしたり飛びかわしたりして、私達の目を楽しませてくれた。

〔とき〕 52年9月18日（日） 9.30〜13.15 曇後雨
〔担当幹事〕 羽田恭子・新宮康生
〔記録された鳥〕 ハシボソガラス ハクセキレイ スズメ ムクドリ ノビタキ トビ ヒバリ オオタカ 不明カモ コチドリ② アオサギ キジバト タカブシギ② トウネン⑩ ハマシギ⑬ タシギ④ オグロシギ⑩ ソリハシシギ① アオアシシギ⑩ キリアイ② キアシシギ① オオソリハシシギ① メダイチドリ⑦⓪ コアジサシ ウミネコ アジサシ
（合計26種、シギ・チドリは数を記入）
〔参加者〕 苣野寿衛吉 早瀬広司 早瀬富 柳沢信雄 柳沢千代子 森やよい 野々村菊 馬場錬成 鷲田善幸 羽田恭子 新宮康生 小野寺敬子
（札幌市中央区宮の森1条16丁目）

鳥民便り

◆おわび 29号11P「鳥民便り」中、北大の代表電話が間違っておりました。正しくは711—2111です。12P木村敏男さんの俳句中、雪鮮湖は雪解湖の誤りでした。以上おわびして訂正します。（編集）

◆カットを 寄せて下さい。「さえずり」用、その他どのようなものでも結構です。はがき、もしくは白い紙に墨か黒インクで。（編集）

◆原稿を 待っています。特に短いもの、「さえずり」欄の手紙・はがきが足りません。鳥の記録、質問や提言、苦情などなんでも結構です。又、今号では紙幅の関係で休載しましたが、北海道探鳥地案内「鳥を探しに行きましょう」の原稿も待っています。特に地方の会員の方、お願い致します。（編集）

◆退会・住所変更の連絡 はすみやかに願います。以前にも通知しましたが、たよりを発送しても転居先不明で戻ってくると、どうにもなりませんので。（総務）

◆会費納入のお願い 昭和52年度の会費未納の方は早急に納入して下さい。会費は個人1000円、団体3000円です。納入方法は郵便振替（口座番号：小樽 18287 北海道野鳥愛護会）でお願いします。

なお会費が1年以上未納の会員に対しては、各種案内及び野鳥だよりの発送を停止することにしておりますので、ご理解のほどお願いします。（会計）

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

★アンケートの発送以来半年を経て、ようやく出来上がった14種の鳥の分布図はいかがでしたか。と言っても初めての試み故、未調査の区画が目立つのは気がかりだが。そこでお願い——空白地帯の観察記録をお持ちの会員がきっといると思う。より正確かつ精度の高い分布図作成のためにそんなデータを貸して下さい。また来年以降もこの事業を継続発展させることになっている。まとめの作業が今から楽しみである。（小川）

★雪が降ったかとおもえば、すぐ暖かくなり冬にはほど遠い感じですが、鳥達にとっては確実に冬がやって来たようです。すでにキレンジャク、マヒワ、カシラダカを見ましたし、今日（11月20日）はギンザンマシコの鮮やかに赤い♂と♀に会いました。冬が楽しみになってきました。このごろキジの姿をよく見かけます。昨年は極端に少なく心配していたのですが、ハンターの餌食にならなければよいがと思っています。（小堀）

★本誌発行の推進力であった森さんが、転勤で東京へ行かれます。お気づきのことと思いますが、森さんがチーフになってから発行おくれがなくなりました。新しい企画もたくさんありました。道産子のヒゲ森さん、本当に御苦労様でした。お元気で。（梅木）

★北海道は九州に山口、広島両県をあわせたよりやや大きい。しかし日本野鳥の会が作成している繁殖地図では、この広い北海道が一まとめにされている。やはり北海道のことは、われわれがやらなければならないだろう。今回鳥類分布の第1回をまとめることができた。これが今後とも継続するよう皆さんのご協力をお願いしたい。（藤巻）

★第1回調査の結果がようやくまとまりました。空白の多いものではありますが、○印の陰にこれを支えて下さった多くの皆さんのご苦労が浮かんできます。今後、回を重ねるごとに着実に立派なものになっていくでしょう。日本の野鳥調査の先駆的な役割を果たせるのではと期待しています。

私事で恐縮ですが、この度転勤で東京へ行くことになりました。24号から手がけ、この号が最後です。苫東問題、釧路湿原川下り・石油備蓄基地建設問題など取り組みたいことがたくさんありましたが、力及びませんでした。北海道の自然、鳥たちがいつまでも豊かであるよう願うとともに、誌上をもってこれまでの皆様のお力添えに深く感謝致します。東京で皆様のご活躍を「たより」で拝見させていただきます。（森）

〔北海道野鳥愛護会事務局〕〒060 札幌市中央区北4西5（林業会館）北海道国土緑化推進委員会内